課題と教育的ニーズに対応した海外での学校経営

前日本メキシコ学院日本コース
滋賀県湖南市立岩根小学校　校長　平　居　繁　和

キーワード：在外教育施設、課題、教育的ニーズ、学校経営、進路指導、国際交流

１．はじめに

(1) 日本人学校でめずらしい本校の特色とは

本校は、日本メキシコ学院日本コースという他の日本人学校とは異なる名称で分かるように日本人学校のなかでめずらしい特色のある学校である。1974年メキシコを訪問された田中角栄首相とエチュベリア大統領との共同声明により両国民の相互理解のための日本メキシコ学院の設立が実現した。Liceo Mexicano Japonesという私立学校の中にメキシココースと日本コースがある。メキシココースはメキシコの教育省の管轄である私立学校としての認可がされており、日本コースは文科省より日本人学校としての認可がされている。広大な敷地に講堂、２つの運動場、温水プール、体育館等、施設面は両コースがあるからこそ享受できる充実度である。また、同じ学校内で現地の交流ができるということは、グローバル化に対応できる人材の育成を目指すにはすばらしい条件を備えている。まとめてみると、

①日本とメキシコ両国民にとって有為な人材を育成することを目的とした国際交流校である。

②併設校という捉えではなく、メキシココースと日本コースをもつ１つの学校である。

ただし、メキシココースは、SEP（Secretaria de Educacion Publica：メキシコ教育省）に基づくメキシコの教育課程であり、日本コースは、日本の学習指導要領に基づいている。

③学院に交流部・日本語教育部があり、メキシココースでは、日本語教育が必修となっている。

④行事等では、日本文化が取り入れられている。

⑤学院の理事会は、日系メキシコ人理事と日本企業等の日本人理事とで構成されている。

しかしながら、実際、文化の違う学校が同じ目的で教育を行うには、大変な努力が必要であり、学校運営における課題は、常にここから発生するといってよい。一つひとつの課題を解決しながら、国際性豊かな人材の育成を目指してるのが本校の現況である。

日本メキシコ学院の全景

(2) 課題と教育的ニーズとは

課題を大きく２つに分けると１つは、前述したようにメキシココースとの調整である。体育館や運動場、講堂などの施設の共有だけでなく、避難訓練や運動会、文化祭、学院朝会など合同で行事も行っており、教育方針の共通理解も行う。また、施設維持管理面についても消耗品購入や修理、掃除の仕方や使い方の問題も含めて話し

合って決めなければいけないことが山のようにある。学院長と事務局長、メキシココース総校長、日本コース総校長で話し合う総校長会とこの４名に加えてメキシココースの幼稚園長、小学校長、中学校長、高等部校長、日本語教育部長、英語部長、文化センター部長、体育部長で話し合う校長部長会を毎週行う。

もう１つの課題は、日本コースを運営するにあたっての課題である。教育的ニーズにどう対応するのかは重要な課題である。児童生徒や保護者、企業等の願いを的確に受け取ること、迅速に対応すること、学校ではできないという答えではなく、このような方法であれば実現できるという姿勢であることが必要である。特に学力の向上と進路指導の充実、いじめの問題、交流の充実、安全対策については具体的な方策を求められる強い要望があり、それぞれに対応していった。

２．目指す子ども像に課題と教育的ニーズに取り組む姿を盛り込む

教育目標「共に生き　未来を創る　たくましいリセオの子」には、「メキシコの地で、日本の子どもたち、メキシコの子どもたちと共に学び、生活してほしい。他の人を思いやり、他の人のためになることに喜びを見出す人になってほしい。健康に気をつけて、元気でたくましく育ってほしい。」という創立以来多くの方々の気持ちがいっぱい詰まっている。この教育目標の実現が、課題や教育的ニーズに対応することになると考える。そこで、校長２年目の目指す児童生徒像に課題と教育的ニーズに取り組む姿を盛り込んで方針を打ち出した。波線部にあたる文言が追加したものである。

目指す児童・生徒像

①「積極的に課題を追求し、表現する」リセオの子・・・学力向上

②「共に励まし合い、目標に向かって高め合う」リセオの子・・・進路の実現

③「自主自立を重んじ、豊かな心と健やかな体でチャレンジする」リセオの子・・・自尊感情の育成

④「お互いの違いを尊重し、関わり合うことができる」リセオの子・・・いじめの問題

①では、課題の追求だけでなく、表現する力も求めていき、児童生徒の成果物や姿から評価にもつなげていくことを重視したいと考えた。学習発表会や総合学習等で以前から表現力につては重視されてきたが子どもの姿から表現力を評価していくことを明確にした。

②では、常に目標を設定し、PDCA（Plan・Do・Check・Action）サイクルで改善していくことを重視した。少人数の日本人社会ではどうしても個々の能力を比較してしまいがちである。目標設定による各個人の伸びによる評価を重視する意図を明確にし、全体の伸びを励まし合う協働の姿を描いたものである。

③では、思考力・判断力をもとに積極的に動くといくことを重視した。

どうしてもお客さんになりがちな子どもの活動を自分たちで創りあげる活動にしていくために積極的な姿勢を育てることを明記した。

④では、お互いを尊重をしているというような外見を装い、いじめの問題を生んでいる姿を改善していくことを重視した。お互いの違いを尊重することはできるが大人も含めて、つながりをもたず関わらないとった現状があった。心身に辛い思いをしたのだから関わらないことが当然のようになっている関係を改善するために行動化を明記した。

３．学校全体の取り組みとして課題と教育的ニーズに対応する

児童生徒像に盛り込むことで、学校全体で課題や教育的ニーズに応えていく基盤ができた。

〇進路の充実については、

①中南米で初めて海外子女教育財団学校説明会を２年連続して開催した。開催にあたって商工会議所を通してメキシコ国内の日本人にお知らせをするとともに、中南米の日本人学校にもメールでお知らせをした。

②学校運営委員会で協議決定し、教員が日本出張をして、進路情報を集めた。受験する学校への訪問、模擬テスト業者への訪問、大手学習塾への訪問等、教員ならではの調査を行い、生徒や保護者に提供した。

③帰国教員に対して10年間、進路情報員の登録をし、本校の児童生徒への進路情報を提供できる基盤をつくった。

④進路学習室を設置し、いろいろな資料を置き、いつでも見られるようにした。

⑤定期的な進路便りを発行するとともに身近におられる先輩のお話を聞く機会をもった。以上のような取り組みを目に見えるように実施していった。

○いじめ防止の問題については、教員だけの問題としてではなく、児童生徒、保護者、教職員、日系、企業の方々を含めた全体の問題としてそれを解決していくような道筋を設定するように取り組んだ。

①いじめ防止ガイダンス、いじめ防止マニュアルの作成

②学校運営委員会での継続した討議の実施

③児童生徒、教員、保護者、理事の参加するいじめをなくそうサミットの実施

④カウンセラーも参加するいじめ対策委員会の設置

⑤教育相談、いじめアンケートの実施　以上のような取り組みを実施し、いじめについて話し合える基盤作りをした。

４．校長が動く

これらの課題や教育的ニーズに応えていくためには、校長がこれらの問題をどのように捉えているのかを説明する責任がある。学校が主体者としてこれらの取り組みを考えていくことは大切ではあるが、子どもを学校や地域みんなで育てるというコミュニティスクールにあたる観点を取り入れることによって、日本の未来を担う子どもたちをみんなで育てていこうという教育の方針を出していきたかった。

そこで、校長が動いたことは、

①いじめをなくそうサミットの実施にあたり、校長が進行役となった。いじめの問題を学校だけで取り組むのではないというメッセージを強く出していきたかった。

②校長室オフィスアワーを設けた。具体的には、月、水、金の長休みと昼休みは児童生徒が校長室をオープンにして、いろいろな話をする。金曜日の1、2校時を保護者と自由に話し合う時間として校長室を開放した。また、相談については校長メールを公開し、相談にあたった。このことにより、願いの裏にある子どもたちや保護者の思いにふれることができた。

③ボランティア登録制度の実施を校長が進めた。読み聞かせボランティアや各種放課後のスポーツで子どもたちの育ちを支えていただいていたが、個人でもいろいろな方法で子どもたちの教育を応援しようとする方々の動く場がなかった。そこで、個人でボランティア登録をしていただき、校長が週末に先生方に聞いてまわり、そこで出てきた支援の要望をボランティアさんに一斉メールを送ってお知らせをし、調整して実施していただいた。また、個人のアイデアがあれば出してもらい、意見を調整して実施した。彫刻刀や電動のこぎりの安全の見守りや体育ゲームの審判、九九や百人一首の聞き取りなど授業の補助や階段をつかった詩や九九などの掲示、中学生のための図書室の整備など毎日数名のボランティアの方が来校されるようになった。このことにより、校長室オフィスアワーに来ていただくことが増え、保護者のいろいろなご意見を聞くことができるようになり、学校の応援団ができた。ご意見のなかには厳しいものもあったが、教員だけに要望するということはなくなり、自分たちのできることもするという協働の雰囲気ができた。

５．これからの日本人学校に求めるもの

これからの日本人学校に求めるものとして、まず、将来の日本を担う子どもを学校だけでなく、保護者や地域、企業、日本人会、日系社会で教育する協働の学校づくりを目指す必要があると考える。親や地域が求め、それに対応して学校が答えるという図式では、高まり合う関係はつくれない。課題を共有し、改善するためにはそれぞれのよさを働かせて行動に移すことが大切である。そのためには、コーディネーターが必要であり、まず、校長

がその責任をもつ。そして、次に親や企業、日本人会等のなかから、この働きをしてくださるにふさわしい方にコーディネーターになっていただく。私は、2年での帰国になり、このコーディネーターをつくるまでには至らなかった。継続して行うためには、必要な役割だと思う。子どもも地域の一員、共同社会の一員である。その子どもをみんなで育てる取り組みを海外であるからこそ大切にしたい。

次にアクティブラーニングの充実である。日本コースでは、1日の時間を7コマ設定し、授業を計画している。標準時間数をはるかに超える授業時間は、まさにアクティブラーニングの時間といってよい。この内容と子どもの姿が日本人学校のよさであると考える。グローバル化に対応できる人材の育成は、設定された単発的な季節行事では育たない。積み上げていく学びを共有することが必要になる。本校では、算数や図工、体育、書写などの授業での交流をし、うまくいかないときにどうやってゴールにたどり着くのかを子どもたちが話し合い、試行錯誤しながら解決していく学習過程をつくった。この学びや取り組む子どもの姿が日本人学校でのよさにつながるようにしたい。日本人学校で学んだ子どもたちが、日本に帰って学びを行動にうつせる力をだせることを願っている。